

---

# 遊戯王 5D's - アカデミアから始まる物語 -

光星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王5Ds - アカデミアから始まる物語 -

### 【Nコード】

N4568M

### 【作者名】

光星

### 【あらすじ】

ネオ童実野シティにあるデュエルアカデミアに通う一人の青年がいた。

その青年には精霊の姿が見えるという、この世界……いや二次創作界ではありきたりな能力を持っていた。

そんな青年と色々なメンバーが、デュエルアカデミアで引き起こすドタバタコメディデュエル劇が今、始まる

！

## 序章・新たなる風

ここはネオ童実野シティ。

この街には『デュエリスト』という人が大勢住んでおり、様々なところで『デュエル』が行われていたりする。

……え？ デュエリストって何かって？ それはだな

説明が面倒だから、このあとの展開から考えてくれ。

「ふわぁゝあ！」

俺は近くにあるデュエルアカデミア高等部に通っており、今日もいつも通り登校していた。

「つと……今日は実技のテストがあるんだっけな……」

すっかり忘れてた……デッキ調整してねー……

そんな絶望感に苛まれていると、一つの声が聞こえてきた。

『龍斗、デッキ調整なら必要ないわよ』

横目で見ると、そこには一人の女性が立って……いや、浮かんでいた。

青い魔導服に身を包み、凛々しい顔をした魔術師 『マジシヤンズ・ヴァルキリア』だ。

「必要ないって、どういう事だよ？」

『どうもこうも、私がデッキを調整しておいたの！』

「それはありがたい」

俺はマジシャンズ・ヴァルキリア 通称“ヴァル”に親指を立て、“ナイス”と言う意味のサインを送った。

「さあ、実技のテスト頑張るぜ！」

『“筆記”もね！』

「それは禁句だ……」

俺は“実技”のテストに気合いを込めるのだった。

## 1章・1・実技テスト開始！（前書き）

「どうも！神崎龍斗です！」

『ヴァルです！』

「前書きと後書きではこの二人でトークをするぞ！他にもゲストを呼んだりするし！」

『面倒ね』

「……もうちよつと違う言い方はないのかよ」  
『ない』

「ハア……」

## 1章 - 1・実技テスト開始！

俺は筆記テストを終え、デュエルアカデミアにあるデュエル場へやってきた。

ここでは番号順に実技テストを受け、終了次第帰ってもいいらしい。

「俺の番号は……」

鞆から紙を出すと、そこには“112”と書かれていたのだが、会場では既に110番の生徒までデュエルが終わっていた。

「うえっ！？もう俺の番じゃん！」

俺は慌ててデュエルディスクを装着し、111番がデュエルしているデュエル場へと向かった。

「私は魔法カード『サイクロン』を発動！この効果で先生の場の『女神の加護』を破壊します！これで『女神の加護』の効果により、3000ポイントのダメージを受けてもらいます！」

試験官

LP30000

111番の人が終わったらしい。

女性か……綺麗な人だな。

髪は黒髪のショートヘアで、顔は一瞬、気弱そうに見えるけど、何処か芯があるような顔付きだ。

「では次！112番！」

そんな観察をしていると、俺の番号が呼ばれる。

「あつ、ハイ！」

俺は返事をし、会場へと入った。

試験官はサングラスをかけ、髪をオールバックにした3〜40の男性だ。

つて、俺！そんな事観察してる暇は無いぞ！？

「では、今からテストを開始する」

「よし！始めるか！」

「デュエル！」

場に設置したソリッドビジョン・システムが起動される。

「では私からだ」

試験官

LP4000

手札6枚

「私は『強欲な壺』を発動」

奇妙な笑い顔をしている壺が現れる。

そうか、今回初めての試験だったから忘れてたけど、試験官のデッキには1枚だけ禁止カードが入ってるんだっけ。

「私はこの効果で2枚カードをドロ―！」

これで試験官の手札は7枚となった。

「私は『グラナドラ』を召喚」

未確認宇宙生命体的なモンスターが試験官の場に現れる。

グラナドラ

ATK1900

「『グラナドラ』の効果発動。このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、ライフを1000ポイント回復する」

試験官

LP4000 5000

確かにグラナドラは攻撃力も高いし、召喚時にはライフを回復できるけど、破壊された時には2000ポイントのダメージを受けるはず……。

試験官、ミスったのか？

「私はさらにカードを5枚伏せて、ターンエンドだ」

試験官

LP4000

手札1枚

『グラナドラ』《攻》

伏せ5



いきなり5枚も伏せるのかよ……！  
迂闊に攻撃はしたくないが、しょうがない。

「俺のターン！ドロー！」

龍斗

LP 4000

手札 6枚

よし、コイツに決めた！

「俺は『魔導戦士ブレイカー』を召喚！」

剣を持った紅き服の魔術師が俺の場に現れる。

魔導戦士ブレイカー

ATK 1600

「コイツが召喚に成功した時、魔力カウンターを一つ乗せる！さらに、このカードに乗っている魔力カウンター1つにつき、コイツは攻撃力が300ポイントアップするぜ！」

魔導戦士ブレイカーの服にある紋章に一つ、光が灯る。

魔導戦士ブレイカー

ATK 1600 1900

「さらに『魔術の書』を発動！これで『魔導戦士ブレイカー』の攻撃力を300ポイントアップする！」

魔導戦士ブレイカー

ATK1900 2200

「行けっ！『魔導戦士ブレイカー』！『グラナドラ』を攻撃！」

魔導戦士ブレイカーは相手の場へと突撃していく。

初バトルの勝利はいただきだ！

「私は手札を1枚捨て、リバーiscardオープン！『レインボーライフ』！」

試験官の場に虹色の光が差し込んだ。

ん？レインボーライフは発動者が受ける全てのダメージを回復に変えるカードじゃ無かったか？

そ、それじゃあ！

「まっ、待て！ブレイカー！」

そんな俺の制止も聞かず、無情にもブレイカーの剣はグラナドラを切り裂いた。

「あああああっ！」

当然レインボーライフにより、この戦闘で与えるダメージは回復になる。

試験官

LP5000 5300

「『グラナドラ』の効果で私は2000のダメージを受けることに

なるが、『レインボーライフ』により、ダメージは回復となる」

試験官

LP 5300 7300

「チツ、回復されたか……！俺は」

「バトルフェイズ終了時に、私は3枚の伏せカードをオープン！『女神の加護』！」

「うえっ！？そ、そのカードは……！」

「そうだ！『女神の加護』は発動した時、3000ポイントライフを回復する。それを私は3枚発動した！」

しまった！やられた！

「私は9000ポイントライフを回復する」

試験官

LP 7300 16300

「くっ！カードを1枚伏せて、ターンエン」

「エンドフェイズにリバースカード、『非常食』を発動」

発動と同時に女神の加護のカードが消えていく。

「『非常食』は自分の魔法・罠カードを任意の枚数、墓地に送ることとで1枚につき、1000ライフを回復する」

試験官が送ったカードの枚数は3枚。ということは……

「私は3枚墓地に送ったので、3000ライフを回復する」

やっぱ、そうなりますよね？

試験官

LP16300 19300

「さらに『女神の加護』が3枚墓地に送られたことにより、通常9000ポイントのダメージを受けるが」

「今は『レインボーライフ』の効果が適応されているから」

「私は9000のライフを回復する」

試験官

LP19300 28300

やべえ、もう涙で前が見えないや……。

『まだ諦めるには早いんじゃない？』

「ヴァル……」

そうだよな！まだ諦めるには早いよな！

「サンキュー！」

ヴァルは俺に向かってウインクをする。

「ライフがいくらあろうと、俺はぶつかって行くのみだ！！俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

龍斗

LP4000

手札3枚

『魔導戦士ブレイカー』《攻》《装備》

『魔術の書』《装備》

伏せ1

「いい心掛けだ！私のターン！」

試験官

LP28300

手札1枚

「私は『治療の神 ディアン・ケト』を発動。この効果で私は1000ポイント、ライフを回復する」

試験官の頭上に老婆が現れ、手を組んで祝福すると、試験官の場がキラキラと光る。

でも一言言つと、天に召されてる途中のような絵面だ。

試験官

LP28300 29300

「私はこれでターンエンド」

試験官

LP29300

手札0枚

さあ、俺に力を貸してくれ！ヴァル！

「俺のターン！ドロー！」

龍斗

LP4000

手札4枚

『魔導戦士ブレイカー』《攻》《装備》

『魔術の書』《装備》

伏せ1

「俺は『マジシャンズ・ヴァルキリア』を召喚！」

青い魔導服に身を包んだ女性魔術師が俺の場に現れる。

マジシャンズ・ヴァルキリア

ATK1600

『やっと出番ね！』

「おう！まだまだ俺のターンは続くぜ！俺は手札から魔法カード『古のルール』を発動！」

俺のフィールドに呪文書らしき本が現れた。

「『古のルール』は自分の手札に存在するレベル5以上の通常モンスターを特殊召喚できる！」

俺が選ぶのは……うん、コイツだ！

「現れる！『ブラック・マジシャン』！」

黒き魔導服に身を包んだ凛々しい男性が俺の場に出現する。  
そのブラック・マジシャンの出現と同時に周りがざわめき始める。

え？俺なんか変な事したっけ？

『ブ、『ブラック・マジシャン』！？あのカードは伝説のデュエリストしか持っていないはず……』

『あいつ何者だ？』

まあ、そんなに気にかけることじゃないか……。

「俺はさらに『師弟の絆』を発動！このカードは自分フィールド上に『ブラック・マジシャン』が存在する時、デッキから『ブラック・マジシャン・ガール』を守備表示で特殊召喚する！」

俺の場に可憐な少女の魔術師が現れた。

ブラック・マジシャン・ガール

DEF 1700

『ひやつほ

！！』

『俺の嫁

！！』

なんだ？何か不愉快な声が……。

そっぴや、このカードのファンって多いんだよな。

って、そんな事考えている場合じゃねえな！

「バトル！『魔導戦士ブレイカー』でダイレクトアタック！」

ブレイカーの刃が試験官の胸を貫く。

あ、モンスターに実体はないから血が出ることはないよ？衝撃はあるけど。

「ぐわっ！」

試験官

LP 29300      27100

「まだまだ追撃だ！ いけっ！ ヴァル！」  
『りょーかい！』

ヴァルは魔法のエネルギーで試験官を攻撃する。

「くっ！」

試験官

LP 27100      25500

……全然ライフが減らない。

「さらに『ブラック・マジシャン』で攻撃！ ブラック・マジック！」

黒いエネルギーの球体が試験官に直撃。

「ぐああああー！」

試験官

LP 25500      23000

「俺はこれでターンエンドだ！」

龍斗



LP4000

手札0枚

『魔導戦士ブレイカー』《攻》《装備》

『マジシャンズ・ヴァルキリア』《攻》

『ブラック・マジシャン』《攻》

『ブラック・マジシャン・ガール』《守》

『魔術の書』《装備》

## 1章 - 1・実技テスト開始！（後書き）

「果たして俺は試験官を倒すことは出来るのか？思ったよりも長引きそうなので、もう次回へ続く！」

『……いないわよ。そんな気遣い』

「俺への気遣いはないのかよ」

『寝言は寝てからいいなさい』

「ひでえ……」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4568m/>

---

遊戯王5Ds - アカデミアから始まる物語 -

2010年10月9日18時37分発行